

【ポスター発表】

青年期のストレスへの意味づけ方尺度作成の試み

—信頼性及び妥当性の検証をふまえて—

○ 日本福祉大学大学院 氏名 藤津 加奈子 (009038)

山崎 喜比古 (日本福祉大学・005041)

キーワード：青年期、ストレス、意味づけ方尺度

1. 研究目的

青年期は疾風怒濤の時期であり、青年はこの時期に数多くのストレスに遭遇し、ストレスを感じる事が想定される。よって、青年がストレスやストレスに効果的に対処していくことは重要である。効果的な対処方法の一つとして、ストレスに対し自分なりに肯定的な意味づけ方を見出していくことがある。先行研究においても多側面からなるストレスへの意味づけ方が示唆されている (Park 2013)。

しかし、先行研究は理論的検討に留まるものが多く、多側面からなるストレスへの意味づけ方を測定する尺度は少ない。また、この尺度を開発することでソーシャルワーカーが青年への支援を行う際に役立つ保健福祉学的知見が得られると考えられる。なぜならばストレスへの意味づけ方の内容はクライアントのストレンクスとなり得ると考えられるからである。そこで本研究では、青年期のストレスへの意味づけ方尺度（以下、意味づけ方尺度）の作成を試み、その信頼性及び妥当性を検証することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

- 1) 調査対象：X 県の 4 年生総合大学の Y 及び Z 大学の青年期に属する大学生 635 名である。
- 2) 調査方法および調査時期：2014 年 12 月～2015 年 1 月の大学講義時間内に質問紙を配布し、即日及び配布後 4 週間以内に回収を行った。
- 3) 調査内容：①基本的属性に関する質問項目（性別・年齢）、②意味づけ方尺度の予備尺度、③②のストレスの種類を尋ねる項目、④②のストレスの深刻度を尋ねる項目、⑤首尾一貫感覚 (SOC; sense of coherence) を測定する SOC-13 (Antonovsky=2001: 222-5; 山崎 1999) であった。
- 4) 統計的解析法：意味づけ方尺度の予備尺度について探索的因子分析（最小二乗法・プロマックス回転）を行った。信頼性を検証するため Cronbach の α 係数を算出した。また、基準関連妥当性を検証するために、SOC-13、ストレスの種類および深刻度を外的基準に置き、意味づけ方尺度及び各下位尺度との相関係数を算出した。統計解析は統計ソフトの R (version 3.2.3) (R Development Core Team 2015) を使用し、有意水準は 5%未満とした。

3. 倫理的配慮

調査対象者には、研究の目的と内容、結果公表に際してデータは統計処理を行い匿名化され本研究の目的以外には使用しないこと、参加や撤回などによる不利益は一切ないことを配布文書及び口頭にて事前に説明した上で、書面にて同意を得た。本研究は日本福祉大学大学院の倫理審査を受け承認を得た。

4. 研究結果

有効回答回収率は42.5% (270名)であった。因子分析(最小二乗法・プロマックス回転)の結果、意味づけ方尺度について「ストレスからの成長」、「目的のある自身の生き方への肯定的評価」、「周囲との関係性の再認識」の3因子が抽出された。意味づけ方尺度および各因子のCronbachの α 係数は、0.88~0.94であった。相関分析の結果、意味づけ方尺度および各下位尺度はSOC-13との間に有意な正の中等度から強い相関($r=0.29\sim 0.49$)を示したが、ストレスの種類および深刻度との間には有意な弱い相関($r=-0.14\sim 0.17$)あるいは無相関を示していた。

5. 考察

意味づけ方尺度および各因子のCronbachの α 係数より、高い信頼性が示された。また、意味づけ方尺度の各下位尺度の内容は先行研究を支持しており、構成概念妥当性が示唆された。さらに、意味づけ方尺度および各下位尺度はSOC-13との間に有意な正の中等度から強い相関を示し、基準関連妥当性が示された。しかし、ストレスの種類および深刻度との間には弱い相関あるいは無相関を示したため、今後更なる研究が求められる。

【引用文献】

1. Antonovsky, Aaron (1987) Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well, Jossey-Bass Publishers. (=2001, 山崎喜比古・吉井清子監訳『健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム』有信堂高文社.)
2. Park, Crystal L (2010) Making sense of the Meaning Literature: An Integrative Review of Meaning Making and Its Effects on Adjustment to Stressful Life Events. Psychological Bulletin, 136(2), 257-301.
3. R Development Core Team (2015) R: A language and environment for statistical computing, R Foundation for Statistical Computing. (<http://www.R-project.org/>.)
4. 山崎喜比古 (1999) 「健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康保持能力概念SOC」『Quality Nursing』5(10), 825-32.